国際交流基金日本語教育紀要
第18号（2022年）
〔報告〕

フィリピンにおける中高生オンライン交流フォーラムの実践報告

―にほんご人フォーラム in フィリピン オンライン 2021―

松田涼子・井手剛平・大日方春菜・笹川史絵

1. はじめに

にほんご人フォーラム（以下、JS フォーラム）は、公益財団法人かめのり財団[1]（以下、かめのり財団）と国際交流基金が共催で実施している事業で、「にほんご人」の育成が目指されている。かめのり財団及び国際交流基金日本語国際センターのホームページによると、「にほんご人」「にほんご人フォーラム」とは次の通りである。「にほんご人」とは、国際社会において日本語を使って何かを達成したいという意思を持ち、そのために日本語でコミュニケーションをする人々の総称で、日本語を使って、議論し、協働できる「にほんご人」が増えることは、21世紀の日本にとって大きな意味を持っているとされている。「にほんご人フォーラム」とは、これからの社会を生きる世代に求められる能力の育成を目指した外国語教育としての日本語教育のモデルを創造して実践し、中等教育における「にほんご人」ネットワークを形成し、若い世代の相互理解の促進とグローバル人材を育成することを目指して、中長期的な見通しで実施しているフォーラムである[2]。JS フォーラムは、東南アジア５か国（インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア）の日本語を学習している中高生と日本の高校生が、主に日本語を使用しながらグループでプロジェクトに取り組み、その成果を発表する国際フォーラムと、東南アジア５か国が各国内で実施しているフォーラムの２つがある。本稿では、国際交流基金マニラ日本文化センター（The Japan Foundation, Manila：以下、JFM）とかめのり財団共催のフィリピン国内フォーラム「にほんご人フォーラム in フィリピン（Japanese Speakers Forum in the Philippines：以下、JSFP）」をオンラインで実施した経緯、オンラインフォーラムの目的や内容、実際の成果と課題を報告する。

2. 従来の JSFP

JFM では、フィリピンの公立中等教育機関における第二外国語教育（Special Program in Foreign Language：以下、SPFL）の１つである日本語教育の支援を行っており、教材の作成や教師研修、学習者奨励活動等を実施している。そのうちの主要な事業である JSFP は、2013年に第１回を開催して以来、毎年続けて実施されている。例年は２泊３日の対面でフォーラムが

行われており、「かめのり中高生アンバサダープログラム（KTAP）」（かめのり財団主催）の一環として日本からも同年代の生徒が参加している。JSFP ではテーマに沿っての活動を通して、21世紀型スキルの向上が目指されており、生徒同士が交流しながら学ぶプログラムが核となっているが、並行して生徒を指導するフィリピン人日本語教師が学ぶプログラムも設けられている。生徒に対しては、日ごろの勉強の成果を発揮したり、新たな知見を得たり、にほんご人として交流をしたりする機会を提供している。教師にとっては、日本語教師としてのネットワークを作り、お互いの経験を基に意見や情報を交換しつつ、日本語教師として研鑽を積む場となっている。従来の JSFP の目的は以下の通りである。

(1) フィリピンと日本の中高生が集い、寝食をともにしながらグループ活動を通じて、にほんご人フォーラムの目的の一つである「自ら学び成長する力、他者と協働する力、課題解決能力、探究する力、推論する力、自ら考え創造する力、発信する力」を伸ばしていく。具体的には、グループのメンバーが協力して、テーマに沿った成果物を作成する。

(2) 上記（1）の活動を通して生徒には「にほんご人」であることを意識してもらい、教師には日本語の教師であることの意義を考えてもらう。また JFM が実施しているフィリピンにおける中等教育段階の日本語教育支援の意義と成果をフィリピン教育省や各学校に周知する。

上記の目的を達成するために、過去のフォーラムでは開始から 5 年ほどは防災関連、2018年以降はエコ（ごみ問題）関連など特定のテーマを設けて実施してきた。2020年の対面フォーラムのテーマは「Let's be ECO-Friendly: Plastic をへらそう !! 」で、参加生徒は、テーマに関する講義や話し合い、ショッピングモールでのフィールドワーク等を経て、フォーラムを通して学んだことやメンバー間の意見を統合し、テーマに沿ったスキット（寸劇）にまとめ上げ、グループごとに上演した。参加教師には「21世紀型スキルの養成を盛り込んだ日本語授業案を考える」という課題があり、生徒プログラムへの参加や見学を通して、生徒が輝いている瞬間や21世紀型スキルを発揮している場面を観察した。そこでの発見をグループ内で共有し、普段の日本語授業へ還元できるように、授業案に更なる改良を加え、最終的にはポスターツアー形式で授業案の発表、共有を行った。

3. JSFP オンライン 2021 実施経緯

3.1　JSFP オンライン 2021 実施背景

フィリピンでは2020年 3 月以降、Covid-19[(3)]感染拡大の影響で、厳しいコミュニティ隔離措置が取られている。特に18歳以下の子どもたちは外出禁止となっており、学校への登校も許可されておらず、対面での授業も実施されていない。この状況がいつまで続くか見通しが立たない中、生徒は自習用教材を用いて、自宅学習を続けている。自由な交流や対面でのコミュニケーションも制限され、従来のような JSFP は不可能となってしまった。しかし、「自ら学び成長

する力、他者と協働する力、課題解決能力、探究する力、推論する力、自ら考え創造する力、発信する力」を伸ばしていくことや、「にほんご人」であることを意識してもらう機会の提供はオンラインでも可能ではないかと考え、どのような形であれば実施が可能なのかコア教師[(4)]グループに意見を聞き、JSFP 事業のオンライン実施を試みることになった。

しかし、フィリピンではオンラインでの実施に際して、以下のような懸念があった。まず、フィリピン人生徒のインターネット環境（接続状況、インターネットに接続できる機器の保持など）である。特に地方では、インターネットに接続できる環境が整っておらず、電波状況も不安定なことが多い。また、中高生はパソコンやタブレット、スマートフォンなどインターネットに接続できる機器を持っていないことも多い。次に時間の制約である。従来は 2 泊 3 日というある程度まとまった時間の中で活動、交流を行っていた。しかし、フィリピン教育省より中高生のオンラインでのスクリーンタイムは午前午後各 2 時間程度を推奨とされており、さらにインターネット環境が整備されていない中での複数日の開催は困難であった。このような状況でも、コア教師グループからは、JSFP のオンライン実施に向けて前向きな意見が多くあり、たとえ 1 日だけの短いフォーラムであっても実施するべく準備を進めることになった。テーマも、「“Positivity in times of Pandemic” いっしょにがんばろう！」とし、コロナ禍の自分自身をふり返り、Positivity[(5)]（前向きな気持ち・考え・態度・行動）を仲間と共有することによって、相互交流を図り、明るく前向きな未来を目指すこととした。

3.2　JSFP オンライン 2021 の目的・目標

2021年の JSFP は Covid-19 感染拡大の影響により従来のものから実施形態や参加者数等に大きな変更を加える必要があったため、上記に記した従来の JSFP の目的（1）（2）を踏まえ、以下を目的とした。

（a）困難な状況下で、自身がこれまでどのように時間を使ってきたかをふり返るとともに、今後どのようなことに挑戦していきたいのかを考える機会を提供することによって、未来を前向きに捉える姿勢を培う。

（b）参加生徒がコロナ禍をどう過ごし、どう自身の将来を考えているかをオンライン上で共有し、話し合いながら成果物を作成することで、相互理解・交流を図る。

（a）（b）を達成する具体的な方法としては、コロナ禍の経験を振り返りながら、未来を前向きに捉えるとはどのようなことなのかを考え、それを仲間とディスカッションし、今後の具体的な行動計画を策定することとした。

以下、（c）（d）は JSFP に参加する教師の目的である。

（c）生徒の発表やディスカッションでの発言を観察することによって、「にほんご人」ネットワークの中での生徒の学びを発見し、教師自身の授業に活かす。

(d) 21世紀型スキルについて改めて見直し、コロナ禍におけるオンラインでの「コラボレーション」を目標として取り上げる。

上記の目的を達成するために、JSFP オンライン 2021 では、次のように生徒目標、教師目標を設定した。生徒目標の全体目標を「プログラムを通して、『にほんご人』としての成長を感じると共に、仲間と協働し、Positivity を具体的に表現する行動計画を立てる。」とし、さらに細かく 5 つの目標を設定した。 5 つの目標は以下の通りである。

・コロナ禍での自分の前向きな行動を振り返る。

・Positivity を具体化し、コロナ禍での生活をより豊かにする挑戦と目標を考える。

・日本語を使ってお互いの考えや目標を聞いたり表現したりして、相互理解を深める。

・課題を達成するために仲間と協働する。

・JSFP を通して新たな人間関係を構築し、その継続を図る。

教師目標の全体目標は、「一連の活動を通して『にほんご人』としての生徒の成長と変化を観察し、21世紀型スキルの『コラボレーション』に焦点をあて、生徒が他の生徒とどのように協働していくか、また、協働からどのようなことを学んだかを考え、実際の授業と結び付ける。」とし、以下の通り 2 つのより具体的な目標を設定した。

・生徒の21世紀型スキル向上という観点から実際の授業について見直すポイントを得る。

・生徒が仲間と協働しながら、活動のテーマを具体化していく過程を観察し、今後の授業に活かす。

上記の目的・目標を達成するために実施した JSFP オンライン 2021 の詳細を次章で述べる。

4. JSFP オンライン 2021 内容

JSFP オンライン 2021 でも、従来の JSFP と同様に生徒プログラムと教師プログラムを実施した。生徒プログラムはフォーラム前の事前課題、フォーラム当日の活動、フォーラム後の事後課題で構成されており、教師プログラムはフォーラム前の事前研修、フォーラム当日の生徒の活動観察、フォーラム後の事後研修で構成されている。生徒プログラム、教師プログラムの詳細は 4.2 節以降で述べる。

4.1　JSFP オンライン 2021 の概要

JSFP オンラインの概要は表 1 の通りである。

表１　JSFP オンライン概要

<table>
<tr><td>実施日</td><td colspan="2">2021年５月９日（日）10時～12時、14時～16時20分</td></tr>
<tr><td>実施場所</td><td colspan="2">オンライン（Zoom 利用）</td></tr>
<tr><td>企画・実施者</td><td colspan="2">JFM 日本語上級専門家、日本語専門家、指導助手　５名
JFM 日本語事業（中等教育担当）プログラムコーディネーター　２名
コア教師　７名</td></tr>
<tr><td>協力者</td><td colspan="2">フィリピン人元コア教師　１名</td></tr>
<tr><td>参加者</td><td colspan="2">フィリピン人生徒　16名
フィリピン人教師　11名
日本人ゲスト　４名</td></tr>
<tr><td>招待客</td><td colspan="2">フィリピン教育省　４名</td></tr>
<tr><td>見学者</td><td colspan="2">かめのり財団　２名
JFM　４名</td></tr>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="2">“Positivity in times of Pandemic” いっしょにがんばろう！</td></tr>
<tr><td rowspan="4">プログラム内容</td><td>生徒プログラム</td><td>教師プログラム</td></tr>
<tr><td>事前課題：
・オンラインツールの使い方を学ぶ
・Facebook グループに投稿する自己紹介シートを作成
・テーマに関するビデオを視聴し、ワークシートに答える
・JFM が作成した日本語のポジティブ表現・語彙リストで日本語を学ぶ
・Facebook グループに投稿された他の参加者の自己紹介にコメントする
・デジタルポートフォリオへの記入</td><td>事前研修：
・数名のグループに分かれ、フォーラム当日の生徒の活動を評価するためのルーブリック評価表を作成</td></tr>
<tr><td>フォーラム当日の活動：
・グループワーク（テーマに関するスローガン、ハッシュタグ作成、スライドプレゼンテーションまたはポスター発表）
・グループワーク発表
・振り返り（振り返りシートの記入）</td><td>フォーラム当日の活動：
・事前課題で作成したルーブリック評価表の観点から、生徒の様子を観察</td></tr>
<tr><td>事後課題：
・感想を述べた１分のビデオ作成
・振り返りシートに記入したアクションプランの実施報告
・デジタルポートフォリオへの記入</td><td>事後研修：
・生徒の観察の振り返り
・グループで作成したルーブリック評価表の見直し</td></tr>
</table>

JSFP オンライン 2021 は、JFM の日本語専門家とコア教師グループが中心となって、企画からフォーラム当日の MC、グループファシリテーターなど当日の運営を担当した。Zoom のメインルームやブレイクアウトルーム、全体の時間管理などは JFM の日本語事業プログラムコーディネーター（中等教育担当）２名が担当した。その他、生徒の事前課題内にあるテーマに関するビデオは、フィリピン人元コア教師（現在は JET プログラム（The Japan Exchange and Teaching Programme）[6]で日本滞在中）が作成を担当した。参加者は SPFL で日本語を学んでいる８または９年生（日本の中学２～３年生程度）のフィリピン人生徒を募集、応募の際には、自己紹介（日本語）とコロナ禍で挑戦したことや習得したスキルについてのエッセイ

（英語）の提出を求め、さらに参加生徒や教師のインターネット環境をチェックするために、オンライン面接も実施した。教師は参加生徒の学校に所属している日本語教師が参加、教師にも生徒がコロナ禍でテーマについてどのように学ぶか、またどのように21世紀型スキルと結びつけることができるかについてのエッセイ（英語）の提出を求めた。また、対面時に実施していた日本人中高生との交流の代わりに、日本人ゲスト4名にフォーラム参加協力を依頼し、生徒のグループワークをサポートする役割を担ってもらった。フォーラム参加を依頼した日本人ゲストとは、過去にフィリピンに派遣されていた元日本語パートナーズ[(7)]の4名である。日本語パートナーズは、国際交流基金アジアセンターが実施している派遣事業である。彼らはフィリピンの公立の学校に派遣され、フィリピン人日本語教師と共にチームティーチングの経験もあり、フィリピンの学校やフィリピン人生徒について知識があるため、参加協力が求めやすかった。その他、招待客、見学者には、生徒のグループワークを自由に見学してもらった。実施時間について、フィリピン教育省より中高生のオンラインでのスクリーンタイムは午前午後各2時間程度と聞いていたため、10時～12時、14時～16時の午前午後各2時間で計画していたが、グループワークの発表等が予定より長くなったため、午後は20分延長し、計4時間20分となった。

フォーラム後は、本事業の広報と実施報告を兼ねた一般公開用の2分半程度のショートビデオ[(8)]と、参加生徒のメッセージ動画が入った振り返り用の20分程度のロングビデオの作成を外注し、ビデオポートフォリオとして記録に残した。ショートビデオはかめのり財団やJFMのホームページやFacebookで公開されているが、ロングビデオは参加者の振り返り用のため、一般公開はしておらず、参加者のみに共有した。

4.2　JSFPオンライン2021プログラム詳細

4.2.1　生徒の事前課題・教師の事前研修

生徒の事前課題は、フォーラム当日の活動に必要なオンラインツールの使い方やテーマについての知識を事前に学ぶことにより、フォーラム内の時間を生徒同士の議論や協働に有効に使えることから、上記の表1のプログラム内容にあるように6つの事前課題を設定した。オンラインツールの使い方については、JFM日本語専門家が作成したオンラインツール（Zoom whiteboard, Google Slides, Jamboard）の使用方法（英語）を読んで学んでもらった。その後、Jamboardで自己紹介シートを作成した。テーマに関するビデオを見て、ワークシートに答える課題では、フィリピン人元コア教師が作成したPositivityに関するビデオ（Positivityとは何か、なぜ今Positivityが必要かなどについて学ぶもの）を視聴し、内容理解確認のためのワークシート（英語）に答えてもらった。

教師にはフォーラム前に2時間の事前研修を設定した。事前研修では、グループに分かれて、

生徒たちが目標を達成できているかどうか判断するための評価項目や評価の観点を考え、教師自らルーブリック評価表を作成した。評価項目については、大枠として、フォーラムの生徒目標がどの程度達成できているかを測る項目を3つ程度、フォーラム内でフォーカスする21世紀型スキル（コミュニケーションとコラボレーション）についてどの程度達成できているかを測る項目を3つ程度で、計6つの評価項目を考えてもらうこととした。フォーラムの生徒目標を測る項目では、「授業で習った日本語表現や、生徒が事前課題で学習したポジティブ表現や語彙が使えているか」という日本語使用について、全ての教師が項目として挙げていた。その他「自信をもってフォーラムに参加しているか」「自分の意見を述べたり、人の意見を聞いたりすることができているか」などの項目があった。21世紀型スキルについての項目は「チームワーク（アウトプット作成への貢献）」「協力」「（日本語使用に限らない）インタラクティブコミュニケーション」などが挙げられていた。

4.2.2　生徒・教師のフォーラム当日の活動

フォーラム当日は以下のスケジュールで実施した。

表2　JSFP オンライン 2021 当日スケジュール

時間	生徒プログラム	教師プログラム
10:00-10:15	開会式（全体）	
10:15-10:35	アイスブレイク（全体）	
10:35-10:45	プログラム説明（全体）	
10:45-10:50	ブレイクアウトルームに移動	
10:50-11:10	アイスブレイク・自己紹介（グループ）	生徒の活動観察
11:10-11:20	日本人ゲストセッション：コロナ禍で日本人ゲストそれぞれが取り組んだこと・挑戦したこと、コロナ禍の日本の様子がわかる写真などを見せて説明（グループ）	生徒の活動観察
11:20-12:00	メイン活動:グループで、Positivity を表すスローガンまたはハッシュタグを作成、その後、作成したスローガンやハッシュタグを説明するためのスライドプレゼンテーションまたはポスターを作成（グループ）	生徒の活動観察
12:00-13:30	休憩	
13:30-14:00	休憩または活動時間（グループの作業進捗状況で、グループ毎に判断）	
14:00-15:00	メイン活動続き（グループ）	生徒の活動観察
15:00-15:10	休憩	
15:10-15:45	発表（全体）	生徒の活動観察
15:45-16:05	振り返り（学校毎のグループ）	生徒の様子を観察しながら、必要に応じて生徒の振り返りを促す
16:05-16:20	閉会式（全体）	
16:20-16:30		休憩
16:30-17:30		事後研修

フォーラムの最初は全員がメインルームに集合した状態ではじまり、フォーラムの全体進行は日本語と英語で実施された。その後、４つのブレイクアウトルームに分かれ、各グループにはフィリピン人生徒４名、フィリピン人教師２～４名、日本人ゲスト１名、コア教師（グループファシリテーター）１～２名、JFM の日本語専門家または指導助手１名が参加した。グループ毎の日本人ゲストセッションでは、できるだけやさしい日本語で、コロナ禍で日本人ゲストが挑戦したことやコロナ禍の日本の様子を発表してもらうようにしたが、生徒の反応を見ながら、必要に応じて英語での説明も入れてもらった。生徒のメイン活動では、事前課題のビデオを視聴して感じたことや考えを共有しながら、グループで Positivity を表すスローガンまたはハッシュタグを作成、その後、作成したスローガンやハッシュタグを説明するためのスライドプレゼンテーションまたはポスターを作成した。（図１）

図１　生徒が作成したプレゼンテーション資料およびポスター

生徒たちはグループ毎に様々な方法でコミュニケーションを取り、活動に取り組んでいた。緊張していたり、インターネット接続状況が不安定でなかなか話し合いに参加できなかったりした生徒がいたグループは、生徒たちが自らメッセンジャーグループを作成し、その中でコミュニケーションを取りあい、作業を進めていた一方で、積極的にリーダーシップを見せ、グループの話し合いを活性化させている生徒もいた。メイン活動では、授業で習った表現や事前課題で学んだポジティブ表現や語彙はできるだけ日本語を使うことを推奨したが、英語使用も可能とした。しかし、参加生徒の地域によって現地語が異なるため、現地語の使用は避けることとした。グループ内の活動の様子は様々であったが、どのグループも皆で協力してスローガンや

ハッシュタグ、ポスターを作成していた。メイン活動終了後、再度全員がメインルームに集合し、全体に向けてグループ毎に作成したスライドプレゼンテーションまたはポスターを見せながら、スローガンやハッシュタグとともに、生徒たち自身が Positivity をどのように捉えたのか、前向きになるために必要なことや大切なことを日本語と英語を交えて発表した。その後生徒とその所属校の教師の小さなグループ（各グループ生徒１～２名、教師１名、コア教師または JFM 日本語専門家、指導助手１名）に分かれ、フォーラムの振り返りを行った。振り返りでは、フォーラム当日の気持ちの変化や感想、目標達成度の自己評価、今回のフォーラムで得たことを活かして、どのようなことに挑戦するのか、取り組むのかといったアクションプランも考えた。アクションプランには、「自分自身と向き合う、自分磨き」「日本語の勉強、上達」「Positivity の実践、拡散」「健康維持（メンタル面含む）」「友人や人々との交流」「時間管理」「今回の体験の共有」「モチベーションを維持する」「家族とともに過ごす」「他人との協力」「新たな言語の学習」などが書かれていた。

教師は生徒の活動中は、事前研修で作成したルーブリック評価表に基づき、自分の所属校の生徒の様子を観察、評価した。生徒の振り返りの時間には、生徒が自身の気持ちの変化などに気づけるよう、必要に応じて生徒の振り返りのサポートを行った。

4.2.3　生徒の事後課題・教師の事後研修

生徒には、フォーラムで得た前向きな気持ちや姿勢、生徒同士の交流を持続させるため、フォーラム参加の感想を述べたメッセージ動画（１分以内）を作成すること、Facebook グループにて、振り返りの際に考えたアクションプランの実施報告をすること、ポートフォリオへの書き込みすることの３つの事後課題を設定した。事後課題で、フォーラム当日に学んだことを活かしたアクションプランの実施報告を行うことによって、生徒一人ひとりのフォーラムでの学びを改めて発表する機会となった。

教師に対しては、フォーラム同日の生徒プログラム終了後に１時間の事後研修を実施した。事後研修では、生徒の観察とグループで作成したルーブリック評価表の振り返りを行ない、生徒の観察から気づいたこと（生徒が活動に取り組む様子や生徒の変化、普段の授業との違いなど）を共有した。ルーブリック評価表の振り返りでは、自分たちが設定した評価項目が、生徒の活動を評価するのに適切だった、特に問題はなかったとした一方で、評価項目にはなかったが、生徒の成長が見られたとして、オンラインツールの使い方や ICT スキル向上について言及している教師もいた。

4.3　SNS・デジタルツールの活用

オンラインフォーラムは１日のみの実施であり、また時間の制約もあったため、フォーラム当日の時間を最大限に有効活用し、また、フォーラム当日の参加モチベーションを高めるため、フォーラム前から生徒同士や生徒と日本人ゲストが交流できるようにFacebookグループを作成した。Facebookグループで積極的な交流が行われるようにJamboardを利用した自己紹介で、お互いの趣味や特技、好きな日本語をシェアできるようにした。フォーラム後も、フォーラムで作成した発表資料やビデオの共有、事後課題となっていたアクションプランをお互いに共有し、フォーラム後の交流も促すことができた。

オンラインで交流するためのSNSやツールなどはたくさんあるが、フィリピンではすでにFacebookアカウントを持っている人が多く、皆が使い慣れている等の理由からFacebookを利用することにした。SNSについては、参加生徒が未成年であるため、利用に際し様々なトラブルが起きないようJFMがグループを管理し、外部からは検索できないように設定、参加者・関係者のみが参加できるように配慮した。また、例年は印刷した紙媒体のポートフォリオを作成しているが、今回はすべてオンラインでの実施ということで、Google Slidesを利用してデジタルポートフォリオを作成した。デジタルポートフォリオの利点として、写真やイラストを使い、カラフルなものが作成でき、他のグループメイトや担当教師にコメントをもらうなど、一人ではなく、みんなで作り上げていくことができた。

4.4　参加者からの評価

フォーラムの最後に参加者にアンケートを実施した。参加生徒16名のJSFPオンラインの全体評価としてとても満足したと回答した生徒が15名、満足したと回答した生徒が１名で、全体評価はとても高いものであった。以下が、評価理由を一部抜粋、和訳したものである。

・緊張してできないと思っていたJSFPでしたが、オンラインでグループメイトに会えたこと、日本人に会えたこと、失敗しても頑張れたことなど、とても満足しています。

・期待以上でした。本当に楽しかったし、にほんご人の仲間と交流しました。フォーラムの全ての瞬間が有意義でした。

参加教師11名からの評価は、11名全員がとても満足したと回答した。評価理由は以下の通りである。（一部抜粋、和訳）

・生徒たちのパフォーマンスに感銘を受けました。

・生徒たちのやりとりやアウトプットを見ていると、楽しくてワクワクしてとても楽しかったです。

・このフォーラムは、生徒だけでなく、教師にとっても成長できる場だと思います。

上記の評価理由は一部であるが、生徒からは初めてのオンライン交流イベントで、うまくで

きるかどうかわからない、大変緊張した、その中でも他のにほんご人と交流できて楽しかったというようなコメントが多くあった。教師からは、テーマである Positivity を、生徒の活動やフォーラムから感じることができた、生徒の成長をみることができたというコメントが多かった。

5. オンラインフォーラムの成果と課題

4.4 参加者からの評価で生徒の「緊張してできないと思っていた JSFP でしたが、オンラインでグループメイトに会えたこと、日本人に会えたこと、失敗しても頑張れたことなど、とても満足しています。」「期待以上でした。本当に楽しかったし、にほんご人の仲間と交流しました。フォーラムの全ての瞬間が有意義でした。」というコメントでもわかるように、オンラインであっても参加者は満足している。また、Covid-19 感染拡大による長期間のコミュニティ隔離措置により今まで対面で実施していた様々なイベントが中止されている中、オンラインの実施でも、生徒の日本語学習に対するモチベーションを上げる、日本語使用機会を提供する、にほんご人のネットワーク構築など、根本的な JS フォーラムの目的は少なからず達成できたと考えられる。また、生徒が作成したプレゼンテーションスライドやポスター（図 1 参照）や、振り返りシートのアクションプランに書かれていた「Positivity の実践、拡散」「今回の体験の共有」「モチベーションを維持する」「新たな言語の学習」からわかるように、テーマである Positivity、未来を前向きに捉えることもできている。以上のことから、フォーラムとして実施した成果はあったと言えるだろう。一方で、以前の対面でのフォーラムを知っている者からは、やはり対面の方がよかったとの意見もある。同じ空間の中で時間を過ごすことは、特に中高生にとっては、様々なインパクトがあり、また、フォーラムとしての活動時間以外の交流も大切である。同じ時間を共有しているうちに、「もっと話してみたい」というモチベーションも湧いてくるだろう。対面でしか得られないその場の雰囲気もある。しかし、オンラインフォーラムも今だからこそ体験できるものであり、オンラインでの交流を体験したからこそ、対面とオンラインのそれぞれの良さが理解できる。

課題としてはオンラインツールの使用に関して、誤ってファイルを削除してしまったというトラブルがあった。ポートフォリオ作成を担当したコア教師がファイルのオーナー権限を持っていたため、復元することができたが、共有ファイルの取り扱いには十分注意する必要がある。

オンラインフォーラムは、対面でのフォーラムに比べ、インターネット環境やスクリーンタイムの制限、同じ空間での交流ができないなど様々な制限もあるが、制限があるからできないというわけではなく、その中で何ができるかを考えるべきである。今回は日本人中高生との交流はできなかったが、日本人との交流機会として日本人ゲストに協力を依頼した。彼らの参加は、日本人と話す機会がほとんどない生徒や教師から、いい経験になった、普段勉強している

日本語を使う機会を得ることができたと大変高評価であり、日本語学習に対するモチベーションも上がったようである。今回のフォーラムのテーマが Positivity であるように、実施側もフォーラムを実施に向けて、できないことを考えるのではなく、できることに目を向けるという前向きな気持ちや考えが必要であろう。対面であれオンラインであれ、日本語を話す機会、新しい友だちを作る機会、ICT に触れる（新しいことにチャレンジする）機会など様々な「機会」を提供することによって、参加者はそれぞれに学びを得ることができ、物事を前向きに捉えることができたのではないだろうか。今後も困難な状況の中でも「機会」を提供できるよう、引き続きオンラインでの交流のあり方について考えていく必要がある。

〔注〕

(1) 公益財団法人かめのり財団とは、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流やグローバル・リーダーの育成など、若者の草の根の交流事業を支援している団体である。詳細は https://www.kamenori.jp/ 参照。

(2) にほんご人フォーラムについてはかめのり財団ホームページ（https://www.kamenori.jp/nihongosupport.html#nihongojin）及び国際交流基金日本語国際センターホームページ（https://www.jpf.go.jp/j/urawa/trnng_t/2013/jp_speakers_2013.html）参照。

(3) 本稿では、新型コロナウイルス感染症を Covid-19 と表記、Covid-19 感染拡大で引き起こされる様々な災難や不幸、経済的・社会的影響など複雑な状況をコロナ禍と表記する。

(4) コア教師とは JFM と共に JSFP の企画実施、国際フォーラム参加など JSFP 実施を担っているフィリピン人教師たち。公立の中等教育機関で日本語授業を担当している教員。

(5) Positivity には様々な意味があるが、本稿では主に「前向きな気持ち・考え・態度・行動」の意味で使われている。

(6) JET プログラムについては、http://jetprogramme.org/ja/参照。（2021年11月22日）

(7) 日本語パートナーズについては、https://jfac.jp/partners/参照。（2021年 8 月24日）

(8) https://www.facebook.com/jfmanila/videos/648904706067107（2021年 8 月24日）